

論文審査の結果の要旨および担当者

|      |   |   |   |
|------|---|---|---|
| 報告番号 | ※ | 第 | 号 |
|------|---|---|---|

氏 名 森藤 庄平

論文題目

Interactions between Verbs and Constructions in English:  
A Constructional View  
(英語における動詞と構文の相互作用—構文論的観点)

論文審査担当者

主 査

|    |       |    |              |
|----|-------|----|--------------|
|    | 名古屋大学 | 教授 | 成田克史         |
| 委員 | 名古屋大学 | 教授 | 木下 徹         |
| 委員 | 名古屋大学 | 教授 | 大室剛志 (文学研究科) |

# 論文審査の結果の要旨

## 論文審査の結果の要旨

### 1. 本論文の構成と概要

本論文は、動詞の意味に帰することができない構文的意味 (constructional meaning) を認める構文主義アプローチのもとで、英語における構文の成立のプロセスがいかなるものかを、動詞と構文の相互作用の観点から解明したものである。

本論文は9章からなる。

第1章では、本論文の目的と構成が述べられている。

第2章では、結果構文の項構造が動詞の意味ではなく、構文全体によって認可されることを示した。特に、動詞によって認可されない結果構文で生じる動詞直後の名詞句 (直接目的語) に焦点を合わせて詳しく論じた。結果構文では、結果句が直接目的語の結果状態を叙述することになるが、この事実を純粋に統語的に捉えることにも、純粋に意味的に捉えることにも問題があることを指摘し、意味と形の組み合わせである構文的観点から捉える必要があることを示した。

第3章では、移動動詞と着点句の概念構造上の相互作用を探ることで、結果構文を一種の移動構文と捉えることができることを示した。さらに、継承関係において上位に位置し、これら2つの構文の特性を共有するより抽象的な構文である「動詞+着点句」構文の存在を主張した。

第4章では、移動構文および移動使役構文では方向句が、結果構文で結果句が、それぞれ、着点句として機能し、なかでも、into 句が着点句の典型となることを示した。「動詞+着点句」構文のプロトタイプとして「動詞+into 句」構文を認め、動詞と into 句の相互作用から得られる達成には、主に動詞の意味から得られる語彙的達成と、into 句が統語上、義務的に顕在化することで得られる統語的達成があることを示唆した。

第5章では、He pushed open the door/He pushed the door open.は不変化詞構文ではなく、結果構文の特殊例 Push Open 構文と分析できることを示した。また、Push Open 構文は push 型動詞が表わす推進移動をプロトタイプとする概念構造を持つことを示した。break 型動詞の場合は、動詞の内在的意味からして語彙的に使役の特性をすでに持つものに対して、push 型動詞の場合は、Push Open 構文の概念構造に沿った形で働く推論規則によって語彙的に使役の特性を持つことを示した。

第6章では、I kicked the hell out of him など为例とする V the hell out of 構文について論じた。前章の Push Open 構文に対して、この構文は pull が意味する分離移動を概念構造に持つ構文であると主張した。この構文では、動詞自体からではなく、V the hell out of 構文から、分離移動の概念構造を得ることを示した。

第7章では、Terry yelled her head off や Pat sang his heart out など为例とする Body-Part off 構文は、V X's head off という型の動詞句構文イディオムであることを示した。従来、この構文は結果構文の1例とされてきたが、本章ではアスペクトとイディオム性の観点から、独自の形と独自の意味との対からなる独立した1つの構文として認める必要があることを明らかにした。また、この構文が「除去」を含意する動詞に基づく構文ではないことも示した。

第8章では、スタイル離接詞としての挿入節 I regret to say と regrettably speaking はともに発話

# 論文審査の結果の要旨

態度を表すモダリティ表現であり、機能的に平行な関係が見られると主張した。その根拠として、第一に、これらの表現が文体離接詞として振る舞う時は **to say** と **speaking** の両方が義務的であること、第二に、**to say** と **speaking** が、それぞれ構文イディオムをマークする標識としての機能を果たしていること、第三に、**to say** と **speaking** は、形と意味のミスマッチを補填する機能を持つことを示した。

第9章は結論である。

## 2. 評価

本論文には次のような学術的貢献が認められる。

- (1) 各構文の項構造に関しては、主に動詞の意味が項構造を認可しているとする投射主義と構文全体が項構造を認可しているとする構文主義とが対立している。英語の結果構文、結果構文の下位構文、および、一見すると結果構文と思われる構文を主に取り上げ、これら統語と意味が複雑に絡み合う構文に関しては少なくとも、投射主義よりは構文主義の方が優っていることを、これら構文における動詞と構文の相互作用を深く考察することにより実証的に示し得た点が非常に高く評価される。
- (2) 取り上げられた構文はどれも統語と意味が複雑に絡み合う微妙な構文であり、理論言語学的にも非常に扱いにくい構文であるにも関わらず、主流の生成文法理論の語彙意味論における先行研究の成果だけではなく、構文文法及び概念意味論における先行研究の成果をも十分に踏まえた上で、小説や映画のスク립トなどから地道に収集した言語資料に基づき取り上げた各構文に関して独創的な分析を加えている点も評価される。
- (3) 移動構文、移動使役構文、結果構文を深く考察することで、動詞と **into** 句の相互作用から得られる達成 (**accomplishment**) には、主に動詞の意味から得られる語彙的達成と、**into** 句が統語上義務的に顕在化することで得られる統語的達成の2種類があることを明らかにした点、更に、これら2種類の達成の得られ方の相違が **into** 句の義務性の相違と関連することを見事に捉えた点が高く評価される。
- (4) **He pushed open the door** は、不変化詞構文でもなく、また **Goldberg (1995)** の主張とは異なり、移動構文と結果構文の混交構文でもなく、**Washio (1997)** の言う弱い結果構文の特殊版であると実証的に明らかにした点が評価される。
- (5) **V the hell out of** 構文においても **the hell** の部分に相当する要素を認可しているのは動詞ではなく、この構文全体であると主張した点と、この構文には **beat-type** の動詞と **scare-type** の動詞の2種類が生じるが、これは空間場から心理場への意味場拡張の当然の帰結であるとした点も評価される。
- (6) **Body-Part off** 構文は、**Levin and Rappaport Hovav (1995)** の主張と異なり、結果構文の一例ではないことを明快に論じた点が高く評価される。結果構文は相的に完結を示すのに対し、**Body-Part off** 構文は未完結を示す。結果構文のイディオムである **paint the town red** (どんち

## 論文審査の結果の要旨

やん騒ぎをする)と Body-Part off 構文とでは Nunberg *et al.* (1994) のイディオムの属性に関して相違を示す。これら2つの相違を指摘する際に用いた言語事実及びそれに基づいた経験的議論は非常に価値の高いものである。

- (7) 第9章は、本論文の単なるまとめとはなっておらず、本論文で扱われた各構文を、互いに関係のない、孤立した存在として単に列挙して取り扱わずに、各構文により構成されるネットワークのノードの1つとして捉えることにより、ネットワーク的な観点から各構文を関係付けする可能性も示唆している点が評価される。
- (8) 第4章から第8章までの5章の中核的内容は、我が国の言語学、英語学の分野で定評のある日本認知言語学会、関西言語学会、英語語法文法学会の機関誌のいずれかに既に掲載されており、学術的貢献が大きいことは公にも認められていることを最後に付言する。

こうした学術的貢献が認められる一方、本論文には次のような問題点が含まれている。

- (1) 第2章で、議論を急いだためか、単なる移動構文と思われる例を使役移動構文と見なして議論した部分が見うけられた。
- (2) 第4章と第5章において、**push** の語彙概念構造に沿った形での推論規則を提案しているが、その規則には明晰さが欠ける面があった。
- (3) 第2章から第7章までは、主に結果構文及び関連する構文を扱っているが、第8章で **I regret to say** 等の挿入節について考察している。これは構文文法の適用範囲を拡げる例ではあるが、それまでに論じてきた文の中核部である動詞句を中心にした構文ではなく、文体離接詞という文の周辺部に属する表現であり、異質な感を免れない。
- (4) 第8章の議論本体の価値を直接左右するものではないが、発話行為 (**speech acts**) に関する理解がやや不十分であると思われる記述が含まれていた。
- (5) 最終的には本論文に含まれる多くの主張が妥当と判断されるが、読者にわかりやすい論述となっているかというやや未熟さが残る。

しかし、こうした点は本論文の価値や独自性を損ねるまでのものとは言えず、本論文が果たした学術的貢献はこれらの問題点を十分に上回るものであると判断される。

### 3. 判定

以上のような審査の結果を基に、本論文は博士（学術）の学位に値するものと判定する。